

動力車新聞号外を徹底弾劾する

(その35)

日刊
動力千葉

80.7.24
No. 490

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)三二五八・九・八(衆)三三三二七二〇七



動力車新聞号外(その35)(以下号外)には、二度にわたる「再建津田沼支部」デッチ上げ策動の破産に慌てふためき大混乱におちいった「本部」反動分子の心情がありとうかがえる。その第一は、これまでの動力千葉破産の破産を認め、「一四〇〇名は動力組合員である」という従来の主張をなげすてしまったこと。第二に、「再建」策動の破産的現実に大混乱し労働組合としていつてはならない「反社会的、ゴロッキ暴力集団」なる言葉を遂に号外に公式に出してしまったこと。これは、いかに彼らが言い訳しようとも、動力「本部」が革マルのセクト的運動にひきまわされ変質したなによりもの証左である。



遂に「再建」策動破産を自認

号外につらぬかれたデマと反階級性は、怒りなくして読めない。だが同時に、「再建」策動の破産に直面しグラグラになった「本部」反動分子の今日の状況と、わが動力千葉の勝利性が号外をとおしてみてとることが出来る。

それは、「(七九年三月以降)機能停止に陥った動力千葉地本」とはじめていいだし、遂に「本部」反動分子は過去一年四ヶ月にわたる動力千葉破産策動の破産を認め、動力千葉地本が国鉄千葉動力車労働組として今日まで、堂々とその闘いを継承発展させてきたことを公式に認めたのだ。「(七九年三月以降)機能停止に陥った...」というが、それは「本部」の理不尽な千葉地本執行権停止―統制処分によって起ったことで、われわれは一四〇〇名労働者の利益を守り、一日たりとも闘いを放棄することができなかったがゆえに、動力千葉を結成してきた。これに対して「本部」は再登録もできずに、しかも動力千葉を認めず、「千葉地本は存在する。業務は『本部』が代行する。一四〇〇名は動力組合員だ」と主張し「オルグ」をしてきたのではないか。いまやこの主張すらも完全になげすてたのである。つまり「本部」反動分子は、過去一年四ヶ月動力「本部」組織が千葉の地になかったことを「機能停止」なるペテン的表現をつかって完全に認めたのだ。

従って今日、「本部」反動分子は一握りの裏切り分子の存在をもって「千葉にはもともと動力組織があったから結成する必要はなく業務再開する」という論理は全くのペテンであり、敗北の自認である。それゆえに「業務再開」路線は、「再建」策動破産の糊塗策であり、たった一人の革マル分子嶋田誠と私利私欲にはしる土屋粹をはじめとする一握りの裏切り分子をかき集め、大会もなしに、規約規則にもとづく民主主義もなしに集団をくみ、これに「労働組合」の仮面をかぶせ、動力千葉破

壊の尖兵にしたてあげんとする悪辣きわまりない策動なのだ。

自らの反階級の本質をさらけ出す「本部」

この悪辣きわまる「業務再開」路線の本質を示すものが、号外でわが動力千葉に対して「反社会的、ゴロッキ暴力集団」なる規定づけをもって、悪罵をなげかけてきたことである。

その意図は、許しがたいことに「動力千葉を社会的に抹殺せよ」ということである。なんと驚くべきことに、ナチス・ヒットラーのユダヤ人虐殺の手段に酷似していることか。反体制を志向する労働組合がいうべき言葉ではないのだ。それをいつてしまったところ今日、「本部」反動分子が6・28、7・5の「再建」策動破産に打撃をうけ大動揺をきたしていることを示している。

これは、4・17津田沼襲撃を行い、片岡支部長に頭蓋骨折という重傷を負わせた責任の大衆的追及に怖れおののき、動揺した「本部」反動分子が、ここから逃げまわるために、一片の回答もできないうちに、動力千葉を「反社会的、ゴロッキ暴力集団」といいなし、だから4・17は正当だと居なおっているのである。

そして再び「4・17型襲撃」を加えるぞとオドシをかけてきているのだ。いまや、「本部」反動分子はファシストであり、鉄労や右翼とも違う労働運動史上類例のないデマ集団であることを露呈したのだ。

われわれは、かかる「本部」反動分子を徹底弾劾する。「業務再開」の本質を示す号外路線を絶対に許しはしない。